

I 研究主題について

1 研究主題

願いの実現に向かい、豊かな自分を創る子ども

2 主題設定の経緯

本校は、子ども中心の教育を模索してきた。

子ども中心の教育とは、子どもが自分の関心をもとに学習に向かう中で、様々な力を身に付けていくような子ども主体の教育活動のことである。教師は、子どもが身の回りの様々な「ひと」「もの」「こと」と関わりながら、さらに関心を高めて実感をもって学べるように、試行錯誤しながらも学習活動を子どもと共に創造することで、**子どもに対する深い理解**を目指してきた。

大岡の子どもには、実社会や実生活の様々な対象との関わりを深めていく中で、自分たちの実現したい願いに近づくために、とにかく直感的にあれこれ試行錯誤する姿が見られる（「求め続ける私」）。そこから新たな気づきを得て、よりよく判断するようになっていく（「創り上げる私」）。その過程では、級友や教師と協働し、ときにはぶつかり合ったり、また地域の人の価値観に触れたりして、本質につながる気づきを見出していく（「共に生きる私」）。このように学んでいるとき、子どもは自己の内側からの求めによって突き動かされ、資質・能力を自分らしく発揮している。子ども中心の学習に迫るほど、学校教育目標の「ともに学びをきりひらいていく子ども」の実現に近づくのである。

このように、身の回りの「ひと」「もの」「こと」に関わりながら自立的に学ぶ子どもを育成する学習活動の創造は、大岡実践の蓄積の「知恵」であり、教育課程編成の「原理」でもある。私たちは、大岡の「知恵」の価値を改めて見出し、「原理」を学ぶことによって、これからも仲間と共に目的や願いを共有しながら新たな価値を創造し、未来を切り開いていく子どもを育てたい。このような考えから、本校は生活科・総合的な学習の時間を核としながら、子ども中心の学びづくりを今後も大切にしていく。そして研究主題を「願いの実現に向かい、豊かな自分を創る子ども」と設定する。

3 主題設定の意図

願いの実現に向かいとは、未来に向かって実現したいことやなりたい自分像をもち、自分で意思決定しながら身の回りの「ひと」「もの」「こと」への関わりを深め、願いの実現に近づいていく子どもの姿を描いている。

大岡の子どもには、**実現したいことやなりたい自分像がはっきりしている**と、**意欲的に**行

動するというよさがある。そのようなよさが発揮されるためには、子どもがそれぞれ自分の「おもしろそうだ」「～できそうだ」という関心をもつことが出発点となる。そのような関心事に沿って豊かな体験活動を重ねていくうちに、子どもは「もっと～してみたい」と願うようになる。また学級の仲間と話し合っって関心事を共有していくことによっても、その関心は広がっていくだろう。こうして関心の高まりと共に「～を実現したい」「～のようになりたい」といった「願い」に膨らんでいく。「願い」とは、「明日、〇〇してみよう」「今度は〇〇に挑戦しよう」といった近い将来に自分のやりたいことにとどまるものではなく、学級の仲間と共に叶えたい「未来に向かって実現したいこと、なりたい自分像」のことである。「願望」や「憧れ」、「夢」と言い換えてもよい。そのような高い次元での「願い」の実現のためには、身の回りの「ひと」「もの」「こと」との関わりが重要になってくる。もっとまちな人と仲良くなりたい、もっと川に詳しくなりたい、商店街の悩み事を解決したい、…こうした願いは必ず子どもの身の回りの「ひと」「もの」「こと」との関わりの中で高まっていく。そうした対象と深く関わることが欠かせないのである。

実現に向かいとしたのは、願ったことが実現した結果のみが重要ではないことを示している。願いの実現に向けて、ひとつひとつ自分（たち）で行う意思決定のプロセスこそが重要である。結果的に当初考えていた「願い」が実現されず、違った形での「願い」に近づいていくような学習展開になっていく場合もある。しかし、そこに向けての意思決定に自分が関与したのだと強く実感できれば、願いを実現しようとした自分を振り返り、そこに至るまでの手応えや充実感、達成感を感じることができるだろう。対象に自ら関わることで願いを高め、自ら意思決定することで資質・能力を発揮する子どもを育てたい。

豊かな自分を創るとは、多様な「ひと」「もの」「こと」と関わることで、自分自身の姿勢や態度についての考えをもち、これからの自分自身につなげていこうとする子どもの姿を描いている。

大岡の子どもには、**自分が関われることに対して、自分の生活や経験から分かったことをもとにあれこれと試行錯誤し「自分事」として学ぶことができる**というよさがある。そのようなよさが発揮されるためには、子どもが諸感覚を使ったり、もっている知識や技能を活用したりして具体的な体験を伴う試行錯誤を繰り返す追究の活動が欠かせない。そうした追究の過程では、身の回りの多様な「ひと」「もの」「こと」との関わりが深まり、今までよりもさらにそれらを大切に思えたり、物事の本質に気付いたりしていくだろう。物事の本質とは、その対象は自分や社会にとってどのような意味をもつのか、自分たちの生活や生き方にどのようにつながるのかについて、子どもが自己との関わりの中で見出すものである。対象を大切に思ったり、本質に迫ったりすることが、これまでの自分の生活のしかたや行動のあり方に影響を与えるような認識の変容につながり、よりよく生活していこうとする態度の形成につながっていく。

豊かな自分を創るとしたのは、対象を大切に思える自分の成長を自覚したり、自分自身の生き方につながる物事の本質に迫る学びを自ら求めたりする子どもを目指すためである。そのような追究を行うことで、自分のよさを感じながら自信をもって生活していく子どもを目指したい。

4 昨年度の成果と課題

昨年度の研究を通して、次のことが分かってきた。(成果…□ 課題…■ 改善のポイント…→)

□子どもは「おもしろそうだ」「～できそうだ」と好奇心をもって対象に関わることで、手応えを感じ、さらに「～もしてみたい」と喜びを感じて追究していく。また、実社会や実生活上の問題に直面し「～しなければ」と目的意識が高まり、より主体的に活動し充実感を得ることが分かった。

■子どもの願いが高まり探究が充実するためには、その材だからこそ学ぶべき価値は何か、その材が実社会や実生活ににおいてどのような意味合いをもつのかといった教材分析を的確に行うことが重要である。それによって目の前の子どもたちのゴールイメージや学びのストーリーを描くことができ、願いや目的の高まりも想定しやすくなる。

→①確かな教材分析、価値を踏まえた願いや目的の明確化のストーリーをイメージする。

■さらに、その価値ある学びに効果的にたどり着くためには、生活科・総合を中核としたカリキュラムマネジメントを意図的に行い、その実行と効果の具体的な検証が必要である。

→②他教科の学びが生活科・総合でどのように活用・発揮されるのかを計画・実行し、見直す。

□教師が個々の願いを大切にすることで、一人一人が自分のしたいことをもち、体験を通して分かったことを振り返って次に生かそうとする主体的な学びが充実することが分かった。そこには、教師の共感、見守り、共に楽しむ姿勢、価値付けといったきめ細やかな手立てが介在することが分かった。

■しかし本当に学級の全員が、自分のしたいことを明確にもって追究できただろうか。より個々の追究を高めていくためには、教師がその子の追究したい方向や思いを見とった上で、その子にとってどのような活動の広がりがあり得るか、どのような道筋で思考を高めていくのか、といった想定を丁寧にしていく必要がある。また、実際の活動ではその子らしい意思決定ができるような支援が必要である。

→③個々の思いを見とり、追究のための思考を引き出していく。

□子どもの必要感に支えられた学習活動では、友達の考えに傾聴し、共感的に聞き合って共通認識を深めていくことが分かった。

■一単位時間の授業で気付かせたいことを教師が設定しても、子どものやりたいことや考えたいこととずれてしまうことがあった。45分間で目指す子どもの姿とは、どうあればよいのかの分析を行った上で、本時目指したい認識の変容を明確にし、その実現のための議論の収束やと拡散などの思考場面の設定、発問や板書といった学習活動を支える教師の的確な支援が必要である。

→④思考の共有、議論の焦点化から新たな気づきを生み出していくための授業を戦略的に行う。

以上の要点①～④をもとにして、今年度は次の内容を研究していく。

Ⅱ 研究主題を実現する研究内容

1 達成感につながる“わくわく”する単元

自分の願いの実現に近づいているという手応えを感じたり、自分にとって意味のある学びだと感じたりするとき、**子どもは“わくわく”しながら主体的に学びに向かっている**。そのような学びの積み重ねによって学習の手応えを自覚し、達成感を感じて次の学びに向かっていく子どもを育てたい。そのために、教師は単元構想において次のことに取り組む。

(1) 教材の価値を分析し、目指す子どもの姿を具体的に設定する

- ・教材の価値を頭で考える前に、とにかく**教師が材に惚れ込む**ことが重要である。惚れ込むとは、その材にしかない魅力的な面についてよく知っているということである。その材で、目の前の子どもはどのように心を寄せ、どんなことをしそうか？その材に関わる人は、どんなところに魅力を感じ、どのような志をもって行動しているのか？その材を学ぶことによって、子どもにどのような態度の変化が現れそうか？また、その材について自分は幅広く知っているか？現実の子ども
の生活では、どんな現れ方をしているか？といった問いを立て、専門家に会って話を聞いたり、実物を見て実際に試したりと、様々な方法で調べる。
- ・その材が魅力的だと教師が感じたときに**心が動いた経験**は、子どもたちに必ず学んでほしい本質的な価値につながっていくことがある。単元の山場と言ってもいい。その山場で**価値にふれた子どもは、単元の（小単元の）最後にどのような姿を見せるだろうか？**「〇〇なあの子がこんなふうに言ってくれたらうれしい」「こんな振り返りがあったら感動する」「この子がこんなことを語っていたら成功だ」と、目の前の子どもをイメージしながら書き出してみる。「教師のゴール」イメージの精度を高めることが重要である。イメージが明確であればあるほど、どのような資質能力の発揮が期待されるかが想定しやすくなる。

(2) 他教科で学んだ力を発揮する場面を具体的に想定する

- ・年間活動計画を活用し、**他教科で学んだ力を汎用的に使う場面を具体的に想定する**。生活・総合の単元のストーリーを想像して、どの教科の力を生かせそうか？それはどの追究の場面なのか？生かすとしたら、それはどんな力か？と具体的に計画し実行する。その際、教師が紙面上で操作するだけでなく、実際の授業場面で効果的な手立てを模索し、計画を見直すことが重要である。

たとえば、子どもが生活科や総合の単元の計画をもとに、教科書等で他教科の学習内容を見渡して、どこでどの力を使えるかを見通すことも考えられる。他教科での学びを「技の宝箱」などとして汎用化しやすい形にし、他の学習場面でも使っていこうという意識をもたせることも考えられる。また、教科横断的な力は往還するという考え方から、生活科や総合で学んだ気付きや問題解決の思考を、他教科の解決場面にあてはめて学ぼうとすることも考えられる。どの方法だと無理なくできそうか判断しながら、意図をもって計画していく。

なお、今年度については、道徳科との関連を必ず全学級計画し進めていく。ⁱ

2 一人一人が“とことん”追究し、仲間と創る授業

仲間と学び合うことで、一人では思い至らなかった考えや目のつけどころに触発されて、新たな気付きや共通認識が生まれ、追究の意欲がまた強くなるという好循環が生まれる。自分の**素朴な疑問から始まって“とことん”追究するからこそ**仲間の考えとのずれを感じ、迷い、深く広く考える必要感にかられ、新たな気付きが「肚落ち」したり、さらにわからなくなったりして追究の意欲を燃やしていくような子どもを育てたい。そのために、教師は授業づくりにおいて次のことに取り組む。

(1) 個の思考を促す（個の追究の場面）

- ・第一に教師は、子ども一人一人の対象の見え方には違いがあることを念頭に置きたい。同じ体験を通してのように見えても、一人一人の子どもの捉えや理解は一樣ではない。そのため、発話や行動、仕草、表情などを観察したり、振り返りの文章を解釈したりして子どもが対象をどのように捉えているかを観察し、教師が肯定的に、共感的に応じる。
- ・その上で、子どもが一人でとことん追究できるよう、教師は子どもを見とり、具体的な支援を行う必要がある。「見とる」とは、その子が願いの実現に向けてどのように対象に働きかけているのかを観察し、教師の目指す子どもの姿を念頭に置きながら、必要な支援を判断することである。
この子は、どのような願いをもっているのか？願いを実現するために何をしようとしているのか？そこから、どのようなことに気付けそうか？その気付きから、対象への働きかけはどう変わるのか？教師はどのような支援をすべきか？を明らかにすることで個の思考を促す。

たとえば、めあてや見通しを具体的にもち、それに対する振り返りを行う時間を設けることも重要である。その際、「今日は何をするの？」とその子がしたいことをはっきりさせるような投げかけをしたり、「そのためには、どんなことを、どの順番でしていく？」などと手順や方法などの見通しをもてるような問いかけをすることも考えられる。

(2) 一人一人の思考をつなぎ、新たな気付きの形成を促す（協働思考の場面）

- ・一人一人の思考をつなぎ、新たな気付きを形成する協働思考の授業づくりでは、明確なゴール設定と的確な戦略が重要である。ゴールとは、本時目標である。なぜこの時間が必要なのか？どんな姿がゴールの姿と言えるか？そのために、どのような活動が必要か？その過程でどのように思考し、認識を深めるような新しい気付きを得ることができるか？そしてそれがどのように生活や生き方につながるのか？をできる限り具体的で明確にすることである。
- ・的確な戦略とは、本時目標を達成するための学習のプロセスにおける教師の支援をできる限り緻密に想定することである。その学習活動は、子どもの必要感に沿っているか？場の設定の工夫は十分か？子どもは、友達のどの発言や行動に共感したり、違いや認識のずれを感じたりするだろうか？どこで気持ちや考えの変化が訪れそうか？そのとき教師は、子どものどの言葉や行動に着目して、どのように働きかけるべきか？45分の流れを読み、戦略を立てる。

【共有化】【可視化】【焦点化】がキーワードである。子どもの発言の裏にある意図やその子らしい見方を「引っ張り上げ【共有化】」（問い返し、動作化、実物）、思考どうしの「つながりを明らかにし【可視化】」（板書）、新たな気付きを形成するためのきっかけを促す「ここ一番の教師の出【焦点化】」のタイミングや言葉の吟味を行う（主要な発問、資料提示、意図的指名）。

これらのキーワードを意識して子どもの学びを充実させるために、「思考ツール」と「環境設定」を適切に活用する。思考ツールは、その時間に働かせる思考をはっきりさせたり、異なる意見どうしのつながりを視覚化したりするのに効果的であり、効率的に結論を見出すのに有効だと考えられる。ただし、思考ツールはあくまで道具であることに注意したい。「環境設定」とは、思考に適した場のづくりや学びの集団の大きさなどである。

注意したいのは、手の込んだ計画を考えるあまり教師のプランを実現させることが目的になってはならない。緻密なプランニングとは、子どもと共に創り上げる授業の実現のための手段である。むしろ緻密に計画しておくからこそ、予想外の展開にも慌てず、ねらいをブラさずに（あるいは柔軟に変更して）子どもの発言を落ち着いて聞くことができる。あくまで、授業は子どものもものになっていなければならない。

Ⅲ 研究内容を深めるための研究方法

1 授業研究会

(1) ねらい

- ◎子どもの見とりや授業のあり方についての知見を蓄え、子どもの学びの充実に生かす。
- ◎部会や学年で相互評価することで、部会として目指す子どもを共有し、協働的に研究に取り組む。

(2) 進め方

(ア) 事前研究会

- ・推進委員会で活動案の検討を行い、より子どもの学びが深まるための教材研究の視点の提示や活動の広がり可能性などについて、授業者に具体的な助言・支援を行う。
- ・その後、拡大学年研究会で検討を行い、さらに学年研究会で細かい検討を十分に行う。
- ・研究授業日の前日までに、本時目標の妥当性、本時の板書の想定を行う。その際、授業を参観する視点（どのような子どもの姿を設定するか、そのための手立て）を話し合う。
- ・授業記録者、事後研究会の司会を一人ずつ決める。

(イ) 本時

- ・参観者は部会で設定した授業参観の視点をもとに、「授業研究の視点メモ」に気付いたことを書く。他部会についても、参観した授業についてはできるだけ書くようにする。
- ・「授業研究の視点メモ」は1枚にまとめて拡大し、部会会場に掲出して議論の参考にする。原本は授業者に渡す。

2019年度 授業研究の視点メモ		※授業を参観した方は記入が少しでも提出してください。	
年	組	指導者	記入者
① 「喜びや充実感を感じる単元構想」「一人ひとりがかかわりを深める授業づくり」について			
↓			
↓			
↓			
② その他			
↓			
↓			

・部会の開始までに授業記録を印刷する（部会人数＋講師人数＋3）。

(ウ) 事後研究会

- ・部会では、授業者による自評は行わず、すぐに議論を始める。その際、1時間の中で現れた子どもの具体の姿や、振り返りで記述されたことをもとに、授業参観の視点に沿って議論を行う。
- ・司会は議論の可視化のために、協議内容を模造紙に記録する（記録の仕方は自由）。講師の指導については四つ切画用紙にまとめる。

(エ) 当日の流れ

(午前中は短縮時程)	
12:45	給食終了 掃除 昼休み
13:25	5校時開始
14:10	5校時終了、下校指導
14:40	部会開始
	①4校時授業の協議(35分間) 講師の指導講評(10分)
15:28	②5校時授業について協議(35分間) 講師の指導講評(10分)
16:20	全体会開始
16:45	授業研究会終了(希望者は15分程度の相談タイムを設けてよい)

2 基礎勉強会

(1) ねらい

◎生活・総合の単元・授業づくりについての悩みや疑問を率直に相談し合ったり、研究内容への理解を深めたりして、前向きに研究に取り組めるようにする。

(2) 日程と内容

第一回 4月13日(月) ・子どもに発揮を期待する資質能力(八太郎)のとらえ、単元立ち上げの種まきの事例

第二回 4月17日(金) ・単元づくり研修(ウェビングから大単元構想まで)

第三回 4月20日(月) ・材のウェビングを用いた単元成立の吟味、他教科関連の検討

※講師を招き、実際の学習が始まったときに考えられる問題点やさらに分析を進めた方がよい点について、助言・指導をいただく。

3 夏季実践研究会

(1) ねらい

◎自分の単元について振り返り、夏休み明け以降の単元の見通しをもつことで、夏休み明けに安心して授業づくりに取り組めるようにする。

◎研究の柱についての中間まとめを行うことで、部会として目指したい子どもの姿を共有する。

(2) 日程と内容

全学年 7月28日(火)

- ・自分の単元について、研究内容に沿って振り返り、夏休み以降の展開について相談する。
- ・部会としての成果と課題を整理し、部会で目指す子どもの姿を設定する。

4 夏季学習会

(1) ねらい

◎最新の教育事情を学ぶとともに、大岡小学校の研究の価値を知り、授業実践への意欲を高める。

(2) 日程と内容

未定(8月22～25日)

5 研究交流

(1) ねらい

◎教育先進校の授業を参観したり、合同研究会を行ったりして、自分たちの研究内容や方法、方向性を見直す機会とする。

(2) 内容

日枝小学校、戸部小学校、本町小学校 研究発表会、合同研修会 等

その他、各自他校の研究発表会や学習会などに積極的に参加し、知見を広げる。

6 部会テーマの設定と公開研に向けた部会研究の提案作成

(1) ねらい

◎研究主題に迫るための部会テーマを設定することで、どのような授業を目指すかの指針とする。

◎研究主題や部会テーマにどのように近付けたか、各部会で見られた子どもの姿を分析し提案することで、研究主題や内容を見つめ直すとともに、部会としての成果と課題をまとめⅢ期に生かす。

(2) 内容と方法

- ・夏季実践研究会で部会テーマを相談し設定する。
- ・部会研究の提案は、公開授業研究会にて7分前後で行う。
- ・部会長が基調提案をもとに研究内容に沿った構成で骨子を作り、部会のメンバーで分担して作成する。

- ・部会内で、ひとつ（もしくはふたつ）学級を引き合いに出して実際の実践をもとに提案する形を取る。ただし、提案内容はどの学級の実践においても大切にされ、授業づくりの重要な要素となった部分を取り上げる。
- ・スライドや文書は、分かりやすく、シンプルな表現を心がける。

7 研究のまとめ

(1) ねらい

◎各実践者が子どもの姿をもとに単元・授業づくりの成果と課題を振り返り、次年度以降の個々の教員の実践力や意欲の向上につながるようにする。

(2) 内容と方法

- ・年度末に、研究内容に沿って、一年間の学級の子どもの姿をもとに単元・授業づくりの成果と課題を整理し考察を加える。

IV 研究の構え

1 子ども観

本校のこれまでの優れた教育実践に通底する子ども観は、「子どもは本来、自ら成長したいと願う存在である」ということであるⁱⁱ。子どもは、自分の力でやりたいことを見つけ、とことん向き合い関わっていく中で、意味のある学びを獲得していく。子どもを、未熟だから鍛えなければならない存在として見れば、教師はいちだん上の立場の者としてあらゆることを指導し、できるようになるまで鍛えてやらなければならないと感じる。しかし、ふと子どものそのままの姿を見てみると、上から見ては分からなかった小さな気付きや成長のドラマが、子どもの中にたくさん起こっていることに気付く。まずは、そのような子どもの見つけ方を、私たち教師が真摯に学ぶべきである。

中には、一見熱心に活動や学習に向かっていないように見える子どももいるだろう。しかしそれは、熱心に向かっていないと解釈している教師の見方がそうさせている。子どもを見ると、教師のバイアスがはたらいっていないだろうか。もしかしたら、頭の中でじっくり考えてからでないと行動に移せない子どもかもしれない。心では対象に関わりたいと思っていながらも、どうしてよいか迷っているのかもしれない。では教師は何をすべきか？

子どもの好奇心や関心を大切にすることからといって、子どもが「やりたい」と言うのを待っているだけでは学びは成立しない。子どもの関心を引き出し、高める工夫が必要である。その関心に沿って子どもがやりたいことを広げていっているようで、実は教師のねらいに沿っているというのは簡単ではない。教師もときには悩み、迷いながら、目の前の子どもにとって価値ある学びになるように試行錯誤していく必要がある。教師も子どもの追究のストーリーを共に創る人として、成長していく存在でありたい。

2 姿勢

(1) 教師個々人が学びを重ねる

- ・授業の質の向上を目指す

(ただし、「よい授業」をしなければならないのではなく、「優れた授業」を目指すことⁱⁱⁱ。「100点満点の授業」である必要はなく、「議論を生み出す授業」であること。分からなくてよい。分からないから、仲間と学べる機会を大切にす。そのために、教師が楽しむ。そして、切磋琢磨する。悔しい、もっといい授業にしたいという気持ちを大切にす。)

- ・どの子ども安心して自分を発揮できる学級集団づくりを目指す

(2) お互いの学びを尊重し合う

- ・子どもの学び、よい授業づくりに誠実に向き合う (教師—子ども)
- ・困り感や子どもの育ちをざっくばらんに言い合い、お互いの考えを大切にしながらよりよい研究を創ろうとする同僚性を大切にす (教師—教師)
- ・子どもどうしが誠実に向き合っているかに常に気を配る (子ども—子ども)

ⁱ 総合的な学習の時間と道徳科との関連については、『学習指導要領解説 総合的な学習の時間 (以下、解説)』に次のように示されている。「道徳科では、道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳性を養う授業が展開される。総合的な学習の時間では、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指す。それぞれの目標、内容を有するものであるが、どちらも児童が自己の生き方を考えることにつながるものである。」また、生活科と道徳科については、「生活科で扱った内容や教材の中で適切なものを、道徳科に活用することが効果的な場合もある。また、道徳科で取り上げたことに関係のある内容や教材を生活科で扱う場合には、道徳科における指導の成果を生かすように工夫することも考えられる。・・・両者が相互に効果を高め合うようにすることが大切である」とある (『解説生活科』)。このことから、総合的な学習の時間や生活科と道徳科は、関連させることでさらに効果的に資質能力を高めていくことが期待できる。大切なことは、あくまで子どもの素直な探究活動の中で生まれる価値ある気づきを教師が逃さず、確かな学びにするための授業づくりにつなげることである。

ⁱⁱ 多くの優れた実践から学べる真理であるように思う。『はじめに子どもありき—教育実践の基本—』(平野朝久、学芸図書、1994)にも、いくつかの教育実践を根拠に、子どもが能動的学習者であることが示されている。伊那市立伊那小学校の教師が作った詩「子どもは未完の姿で完結している」が示唆に富んでいる。

ⁱⁱⁱ 横浜国立大学大内美智子先生の特別記念講演よりご示唆をいただいた(2020年2月15日)。「よい授業」より「優れた授業」を。「よい授業」は、指導案通り、時間通り、教師のねらうゴール=正答にたどり着く授業。もちろん、これを否定するものではない。しかし最も大切なことは、「優れた授業」にすること。「優れた授業」では、子どもの議論が白熱し、ゴールまでいかないこともあるかもしれないが、それもよしとする。頭の中では汗をかいて考えている。実は、本時の目標を達成しているのではないか。45分の中でより効果的・効率的な授業運びも大切だが、「指導案通り」「正答」といった形や体裁に囚われず、原則は「優れた授業」を目指すべきであると考え。